

第3章 第3期(通常期)における勤務実態

1. 第3期の調査協力校の概況

第3期の調査期間は、平成18年8月28日(月)から平成18年9月24日(日)までの4週間である。

まず、第3期の調査協力校の時期的特徴について紹介する。

第3期において回答のあった319校の小学校・中学校は、調査期間の前半に児童・生徒の夏季休業期(以下、「夏季休業期」)を含んでいる。第1章でも述べたように、夏季休業期には基本的に授業はなく、登校する児童・生徒の数も少ない。これに対して夏季休業期後の通常の授業などが行われている期間(以下、「通常期」)には、授業などのほか、学期始めに伴う業務などが集中する傾向にある。そのため、夏季休業期と通常期では、教員の業務における質と量に大きな違いがあると考えられる。そこで第3期については、調査協力校の夏季休業期の終了日の情報をもとに、データを夏季休業期と通常期の2つの時期に分けて分析を行った。

なお、調査協力校における夏季休業期の終了日の分布は表2-3-1のようにになっている。

分布をみると、第3期の調査が始まる8月28日(月)以降に夏季休業期が終了する学校は、およそ8割におよぶ。つまり、8割の学校で、調査期間である28日間のうちに1~7日間の夏季休業期を含む。残る1~2割の学校では、調査期間中に夏季休業期を含んでいない。

本章では、夏季休業期の終了後の時期における教員の勤務実態の特徴を検討するため、第3期では、通常期について報告を行うこととする。

表2-3-1 第3期の調査協力校における夏季休業期の終了日

夏季休業期 終了日	8月16日 (水)	8月17日 (木)	8月18日 (金)	8月20日 (日)	8月21日 (月)	8月22日 (火)
	1 0.3	2 0.6	1 0.3	15 4.7	4 1.3	7 2.2
8月23日 (水)	8月24日 (木)	8月25日 (金)	8月26日 (土)	8月27日 (日)	8月28日 (月)	8月29日 (火)
	6 1.9	19 6.0	8 2.5	1 0.3	6 1.9	10 3.1
	9 2.8					
8月30日 (水)	8月31日 (木)	9月3日 (日)	計			
	11 3.4	217 68.0	2 0.6	319 100.0	校	%

2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

(1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず、第3期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-3-2)。

小学校では、残業時間量は平均で1時間37分、持帰り時間量は平均30分、これらを合わせた時間の平均は2時間08分である。

中学校では、残業時間量は平均2時間11分、持帰り時間量は平均19分、これらを合わせた時間の平均は2時間30分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも34分長い。一方、持帰り時間の平均は小学校の方が中学校よりも11分長い。なお、小学校・中学校での残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項で述べる。

次に、第3期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-3-3)。

小学校では、残業時間は平均で16分、持帰り時間は平均で1時間23分、残業時間と持帰り時間を合わせた時間の平均は1時間40分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校では基本的に休日に学校では仕事を行わないといえる(表2-3-3)。

中学校では、残業時間と持帰り時間はほぼ同じで、残業時間は平均1時間29分、持帰り時間は平均1時間31分と、学校での残業も自宅での持帰り仕事も1時間30分ほどである。これらを合わせた時間の平均は3時間01分である。また、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値がおよそ40~50分もひらいていることからわかるように、中学校では休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-3-3)。これは後の図2-3-3や図2-3-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも1時間13分長い。小学校と中学校それぞれの残業時間における業務内訳については後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために長くなると考えられる。

以上、第3期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも約1時間長く(表2-3-2)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも1時間07分長い(表2-3-3)。持帰り時間は勤務日よりも休日の方が約50分長く、休日には学校で仕事をせず、自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-3-2、表2-3-3)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも2時間弱長い(表2-3-2)。休日においては、残業時間と持帰り時間はほぼ同じ長さであり、これは小学校の教員にはない特徴である(表2-3-3)。持帰り時間は勤務日よりも休日の方が1時間10分ほど長く、休日でも自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-3-2、表2-3-3)。

表2-3-2 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間37分 〔1時間30分〕(0.996)	30分 〔15分〕(0.659)	2時間08分 〔1時間59分〕(1.204)
中学校	2時間11分 〔2時間06分〕(1.143)	19分 〔6分〕(0.524)	2時間30分 〔2時間24分〕(1.253)
全体	1時間55分 〔1時間47分〕(1.113)	24分 〔9分〕(0.599)	2時間20分 〔2時間13分〕(1.245)

〔 〕内は中央値、()内は標準偏差を示す。

表2-3-3 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	16分 〔0分〕(0.698)	1時間23分 〔1時間00分〕(1.479)	1時間40分 〔1時間16分〕(1.625)
中学校	1時間29分 〔37分〕(1.979)	1時間31分 〔49分〕(1.882)	3時間01分 〔2時間33分〕(2.458)
全体	55分 〔0分〕(1.637)	1時間27分 〔56分〕(1.707)	2時間23分 〔1時間49分〕(2.213)

〔 〕内は中央値、()内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第3期(通常期)の教員全体における残業時間量・持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第3期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-3-1から図2-3-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校、中学校の結果を検討していく。

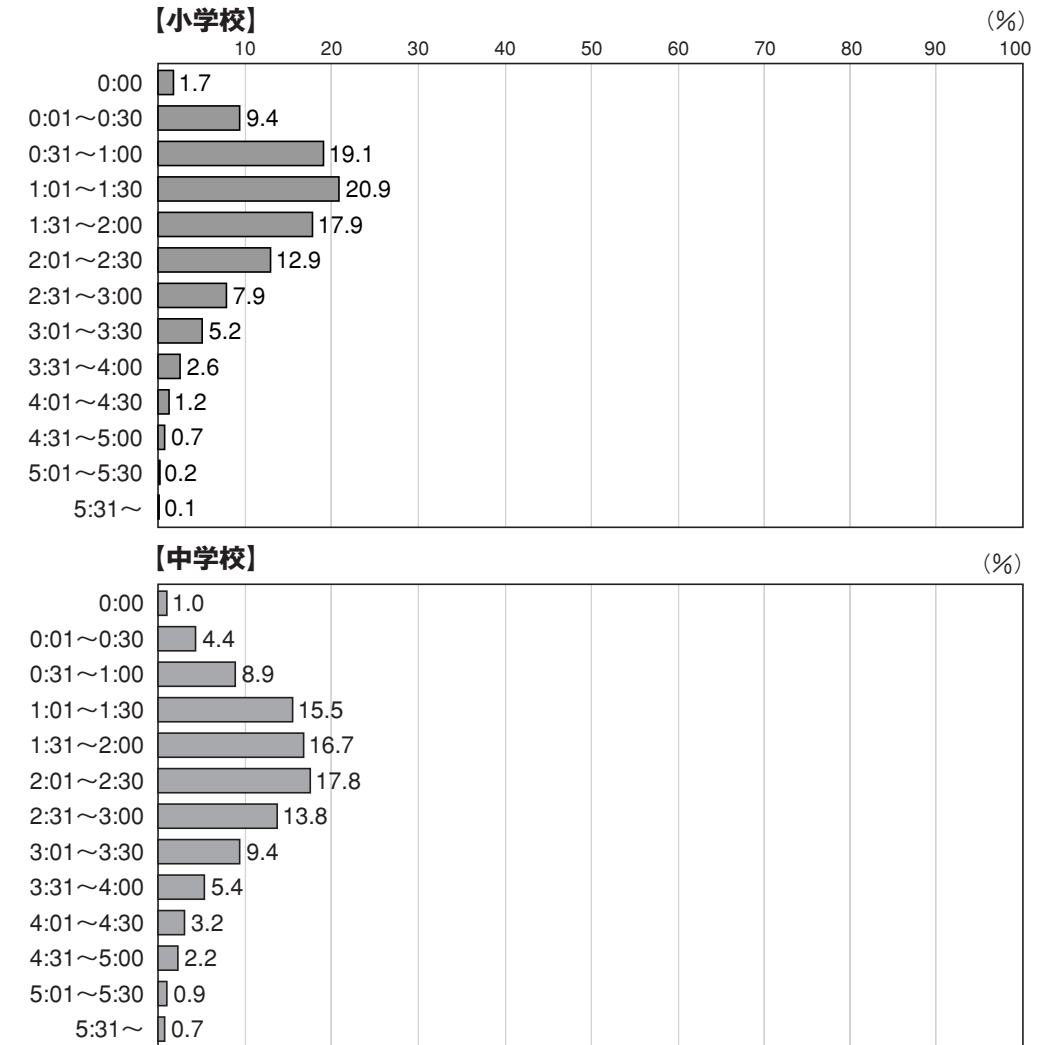
まず、第3期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-3-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.7%で、残業を行わない教員はほとんどいない。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は9.4%、31分~1時間以下は19.1%となっており、3割弱の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、残業が1時間01分~1時間30分以下の教員は20.9%、1時間31分~2時間以下の教員は17.9%、2時間01分~2時間30分以下の教員は12.9%、2時間31分~3時間以下の教員は7.9%と、1時間01分~3時間以下の残業を行う教員はおよそ6割である。さらに、3時間を超える残業を行う教員も1割存在する。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.0%で、残業を行わない教員はほとんどいない。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は4.4%、31分~1時間以下は8.9%となっており、約13%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分~1時間30分以下の教員は15.5%、1時間31分~2時間以下の教員は16.7%、2時間01分~2時間30分以下の教員は17.8%、2時間31分~3時間以下の教員は13.8%と、1時間01分~3時間以下の残業を行う教員は6割強に達する。さらに、3時間を超える残業を行う教員は2割を超える。

以上から小学校・中学校ともに、ほとんどの教員が勤務日に残業を行っており、およそ6割の教員が1時間01分~3時間以下の残業を行っていることがわかる。また、小学校よりも中学校の方が、概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-3-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第3期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-3-2)。

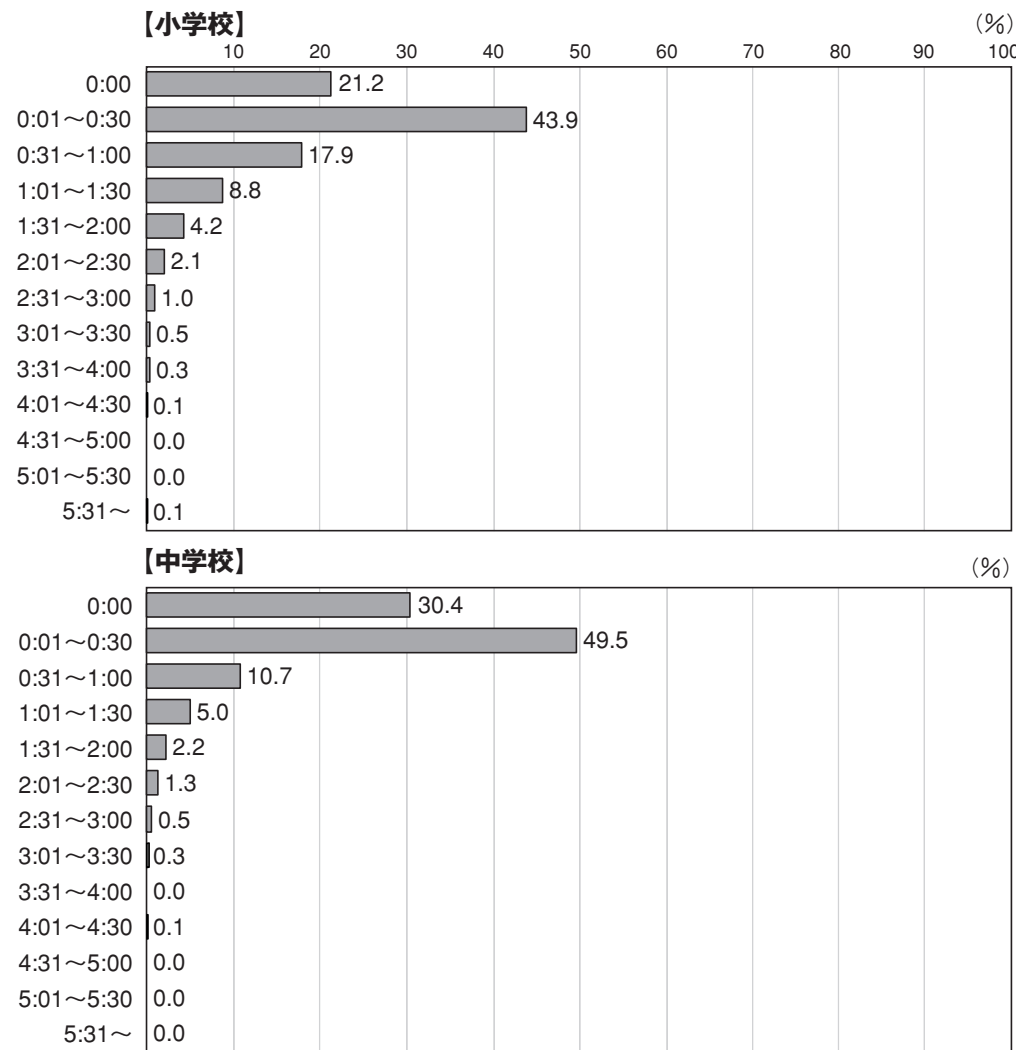
小学校の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が21.2%であり、持帰り仕事をを行わない教員は2割ほどである。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は43.9%、31分～1時間以下は17.9%となっており、6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は2割弱いる。

中学校の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が30.4%であり、持帰り仕事をを行わない教員は3割ほどである。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は49.5%、31分～1時間以下は10.7%となっており、全体として6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は1割弱いる。

以上、第3期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事をを行わない教員は小学校では2割、中学校では3割ほどいる。また、小学校・中学校ともに、6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。

第3期(通常期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、ほとんどの教員が残業を行っており、小学校では約67%の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行い、中学校では約46%の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-3-1)。持帰り仕事をを行っていない教員は小学校では2割、中学校では3割いるが、小学校・中学校いずれも6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている(図2-3-2)。

図2-3-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第3期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討してみよう(図2-3-3)。

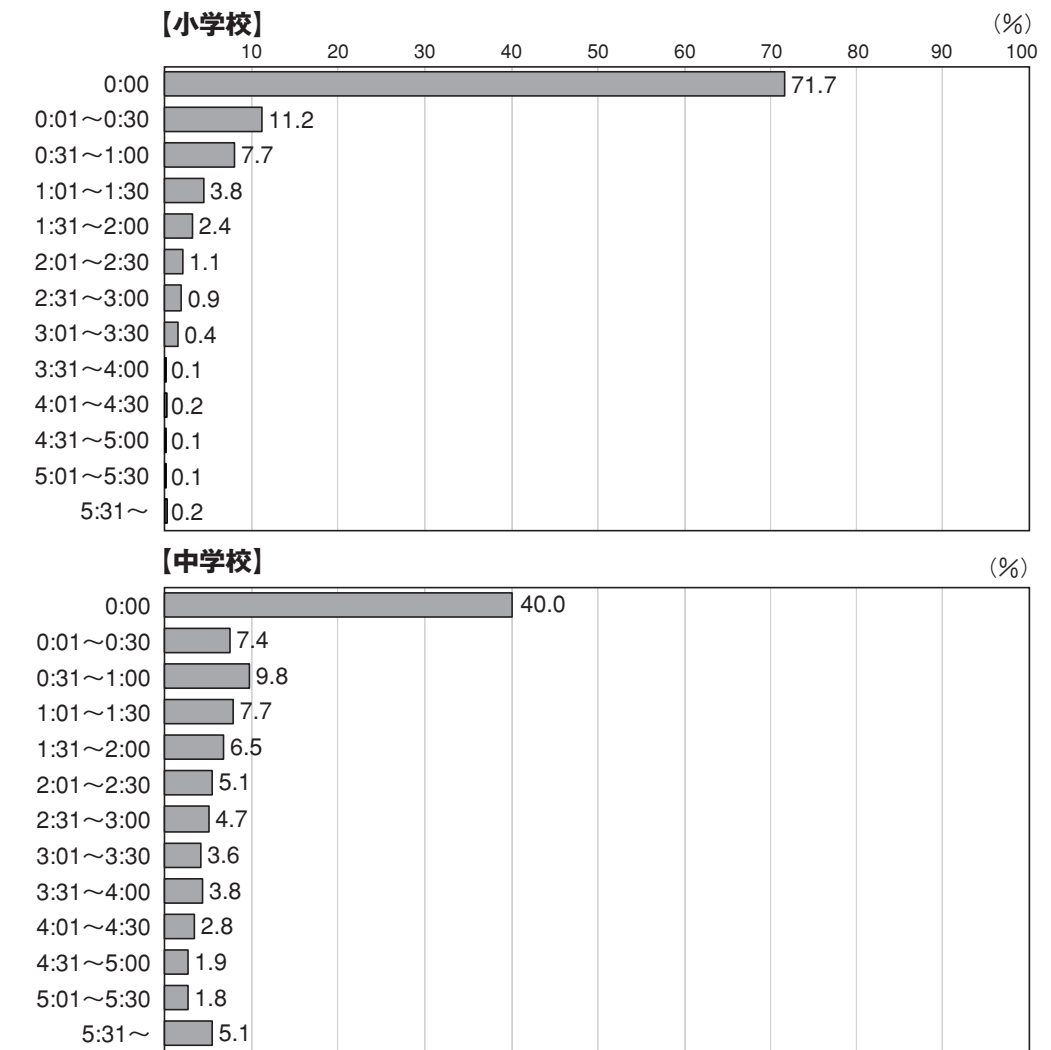
小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が71.7%であり、勤務日(図2-3-1)と比べると、休日にはほとんどの教員が学校に出勤することはないといえる。しかし、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員も20%弱、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員も約8%いる。

中学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が40.0%であり、勤務日(図2-3-1)と比べると残業を行う教員は少ない。また、小学校よりも休日に残業を行う教員が多いといえる。残業時間は教員によって差が大きく、幅広い時間帯に分布している。残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が2割弱、1時間01分～2時間以下の教員が1割強、2時間01分～3時間以下の教員が1割、3時間01分～5時間以下の教員が1割強存在する。

さらに、休日に学校で5時間を超える業務を行う教員が約7%存在するのは、小学校にはない中学校だけの特徴であるといえる。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、中学校の教員が実際に休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において紹介する。

以上をまとめると、次のようにいえる。第3期(通常期)の休日の平均残業時間量については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割存在する。また、特に中学校において、残業時間は教員間での差が大きく、幅広い時間帯に分布している。

図2-3-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第3期(通常期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-3-4)。

小学校における休日の平均持帰り時間の分布は、0分が19.7%であり、勤務日(図2-3-2)とそれほど大きな差はない。休日でも8割の教員が持帰り仕事を行っている。持帰り時間は、1時間以下(0分をのぞく)の教員は3割、1時間01分～2時間以下の教員は約25%と、過半数の教員が2時間以下(0分をのぞく)の持帰り時間となっている。他方、2時間01分～3時間以下の教員は1割強、3時間を超える教員は1割強存在する。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が25.8%であり、休日に持帰り仕事を行わない教員は、勤務日(図2-3-2)より約5ポイント少ない。休日でも7割強の教員が持帰り仕事を行っている。持帰り時間は、1時間以下(0分をのぞく)の教員は3割弱、1時間01分～2時間以下の教員は2割弱と、およそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の持帰り時間となっている。他方、2時間01分～3時間以下の教員は1割、3時間01分～5時間以下の教員は1割存在する。さらに5時間を超える教員も約6%存在する。

小学校・中学校いずれにおいても、勤務日(図2-3-2)よりも休日(図2-3-4)の方が、持帰り仕事を行う教員が多い。

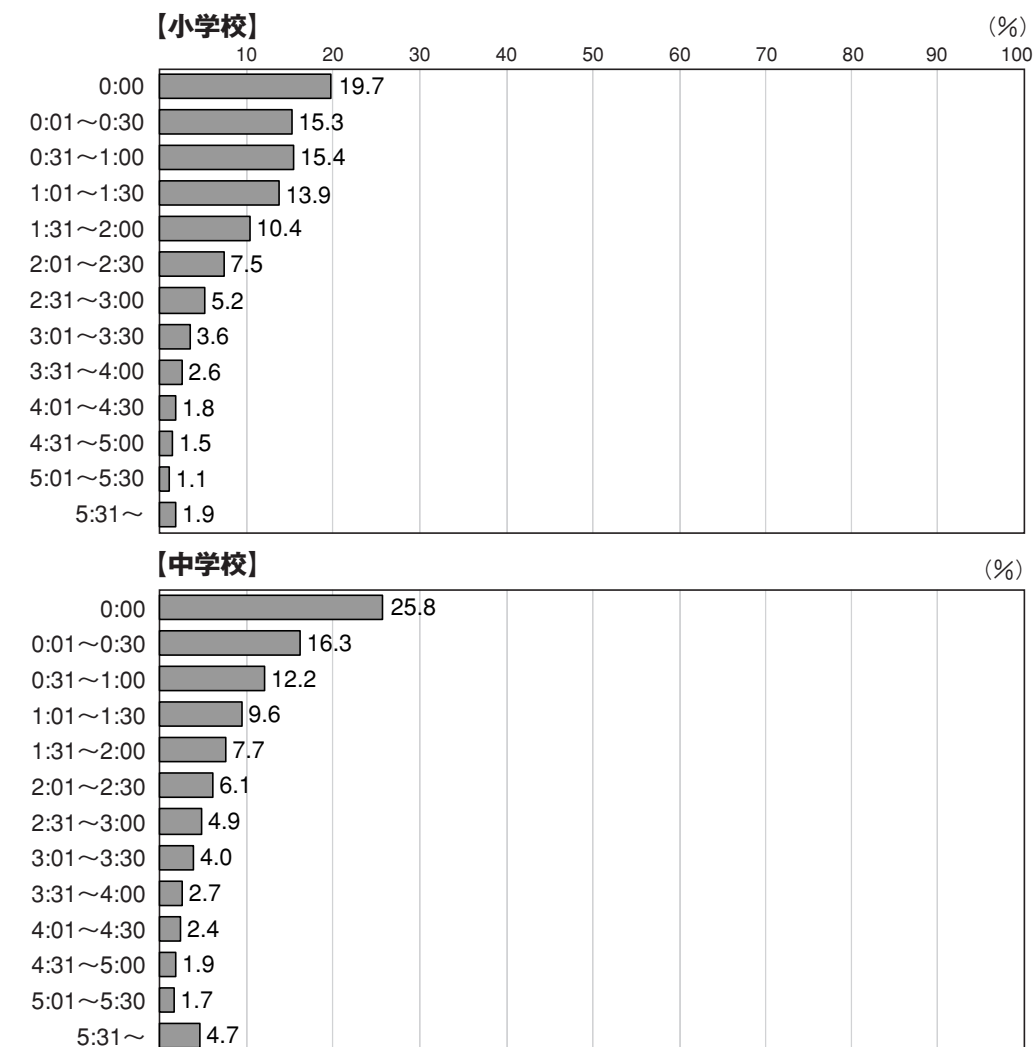
以上のことから、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割、中学校では2割強存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員間での差が大きく、およそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っているが、3時間を超える教員も、小学校では1割強、中学校では2割弱存在する。

第3期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割存在する。また、中学校では教員間で残業時間の差が大きい(図2-3-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割、中学校ではおよそ4分の1存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、およそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っているが、3時間を超える持帰り仕事を行っている教員も、小学校では1割強、中学校では2割弱存在する(図2-3-4)。

以上から次のことが指摘できる。

第3期(通常期)においては、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、6割の教員が1時間01分～3時間以下の残業を行っている(図2-3-1)。休日には残業を行う教員は小学校では3割弱、中学校では6割となり、その残業時間には個人差がある(図2-3-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日(図2-3-2)と休日(図2-3-4)ではそれほど大きな差はなく、休日の方が若干増えるが、いずれも小学校ではおよそ8割、中学校では7割である。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は6割が1時間以下(0分をのぞく)に集中するが(図2-3-2)、休日の持帰り時間は教員間で差が大きく、およそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の業務を行っているが、3時間を超える業務を行っている教員も、小学校では1割強、中学校では2割弱存在する(図2-3-4)。

図2-3-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第3期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、その内訳を検討する。

第3期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第3期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-3-4、表2-3-5)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校で最も長いのは、授業準備で22分である。中学校で最も長いのは、部活動・クラブ活動で22分である。小学校で2番目に長いのは成績処理で11分、つづいて学校行事が9分、事務・報告書作成が8分である。中学校では2番目に長いのは授業準備で19分、つづいて学校行事で14分、事務・報告書作成11分である。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳は、授業準備・学校行事が長い。学校行事の時間が長いのは、第3期の時期的特徴であるといえる。中学校ではこれに部活動・クラブ活動が加わる(表2-3-4)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは授業準備で、小学校では11分、中学校では6分である。2番目に長い業務は、小学校・中学校ともに成績処理で、小学校では6分、中学校では4分である。3番目から5番目に長い業務は、小学校・中学校で若干順位の変動はあるが、事務・報告書作成、学年・学級経営、その他の校務が1~3分ずつである(表2-3-5)。

表2-3-4 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	22分	部活動・クラブ活動	22分	授業準備	20分
2	成績処理	11分	授業準備	19分	部活動・クラブ活動	12分
3	学校行事	9分	学校行事	14分	学校行事	12分
4	事務・報告書作成	8分	事務・報告書作成	11分	成績処理	10分
5	学校経営	8分	成績処理	9分	事務・報告書作成	9分

表2-3-5 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	11分	授業準備	6分	授業準備	8分
2	成績処理	6分	成績処理	4分	成績処理	5分
3	学年・学級経営	3分	事務・報告書作成	1分	学年・学級経営	2分
4	事務・報告書作成	2分	その他の校務	1分	事務・報告書作成	1分
5	その他の校務	1分	学年・学級経営	1分	その他の校務	1分

次に、第3期(通常期)の休日について検討しよう(表2-3-6、表2-3-7)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では成績処理と授業準備が最も長く2分、以下同じ値で、保護者・PTA対応、その他の校務、地域対応が1分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く64分である。以下、成績処理、授業準備、その他の校務、学校行事がそれぞれ3分である(表2-3-6)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く26分、つづいて成績処理が23分、事務・報告書作成が7分、学年・学級経営が5分、その他の校務が5分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く40分、つづいて授業準備が15分、成績処理が13分、事務・報告書作成が4分、その他の校務が3分である。休日では成績処理や授業準備が長く、中学校では部活動の時間が長い傾向があるといえる(表2-3-7)。

休日の残業時間・持帰り時間における主要な業務は、小学校においては成績処理や授業準備、中学校においては部活動・クラブ活動、成績処理、授業準備など、学校での残業についても自宅での持帰り仕事についてもほぼ同様の内訳である。しかし、学校で残業として行う場合と、自宅で持帰り仕事として行う場合では、業務に費やす時間が異なる。たとえば、小学校では休日の残業時間における成績処理は2分であるのに対し、休日の持帰り時間においては23分と増加する。また、中学校では休日の残業時間における成績処理は3分であるのに対し、休日の持帰り時間においては13分と増加する。成績処理などの業務は、学校で行うことも多いが、持帰り仕事として、自宅でより時間をかけて行っていることがわかる。

表2-3-6 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	2分	部活動・クラブ活動	64分	部活動・クラブ活動	34分
2	授業準備	2分	成績処理	3分	成績処理	3分
3	保護者・PTA対応	1分	授業準備	3分	授業準備	3分
4	その他の校務	1分	その他の校務	3分	その他の校務	2分
5	地域対応	1分	学校行事	3分	学校行事	2分

表2-3-7 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	26分	部活動・クラブ活動	40分	部活動・クラブ活動	22分
2	成績処理	23分	授業準備	15分	授業準備	20分
3	事務・報告書作成	7分	成績処理	13分	成績処理	18分
4	学年・学級経営	5分	事務・報告書作成	4分	事務・報告書作成	6分
5	その他の校務	5分	その他の校務	3分	その他の校務	4分

3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第3期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

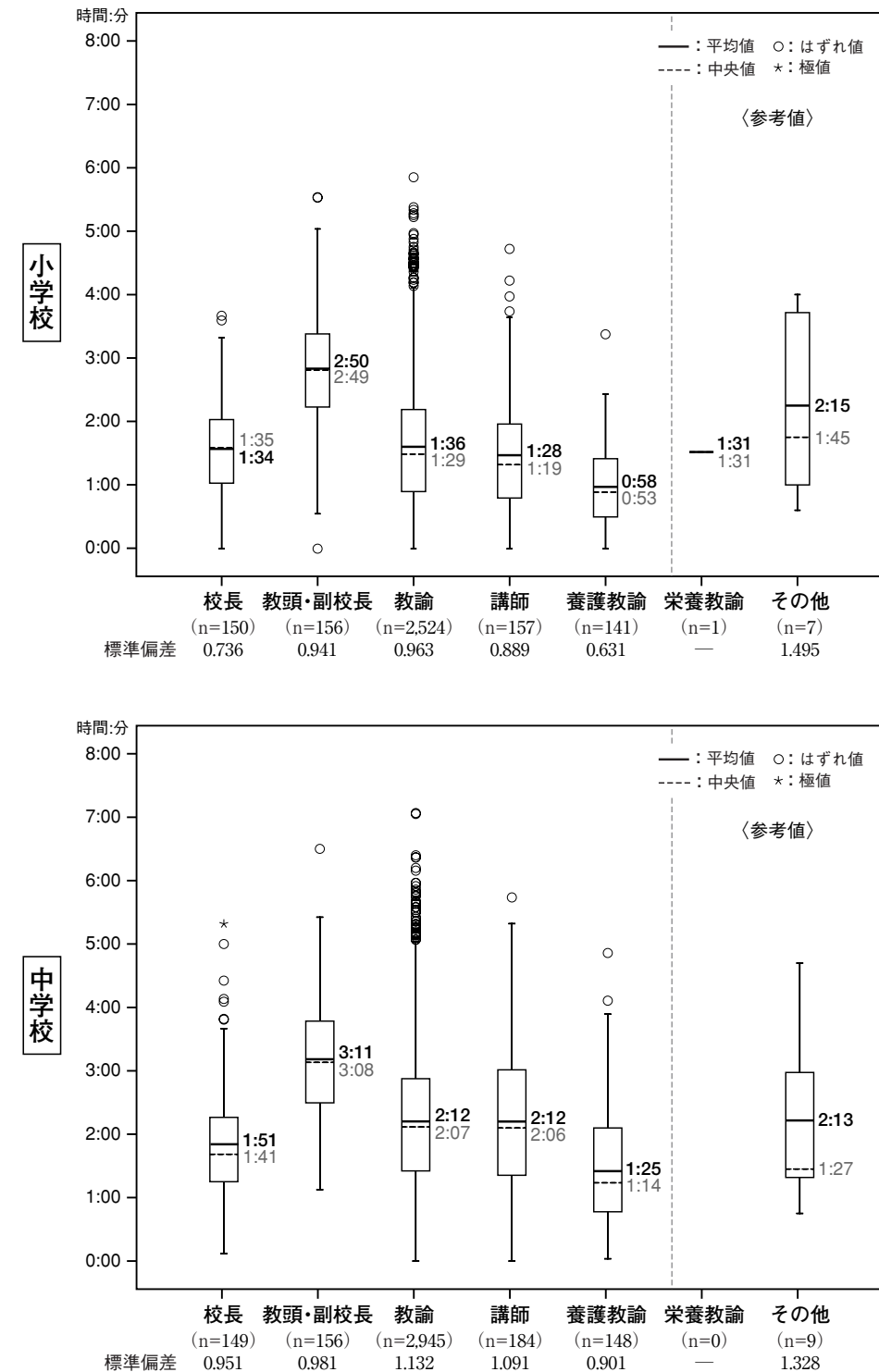
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り業務として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討していこう。

第3期(通常期)の勤務日における平均の残業時間量は、図2-3-5の通り、小学校の教頭・副校長は2時間50分、中学校の教頭・副校長は3時間11分であり、他の職階に比べて圧倒的に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は1時間34分、教諭は1時間36分、講師は1時間28分とほとんど差はない。中学校では校長は1時間51分、教諭・講師は2時間12分と、校長よりも教諭・講師の方が20分ほど長くなっている。

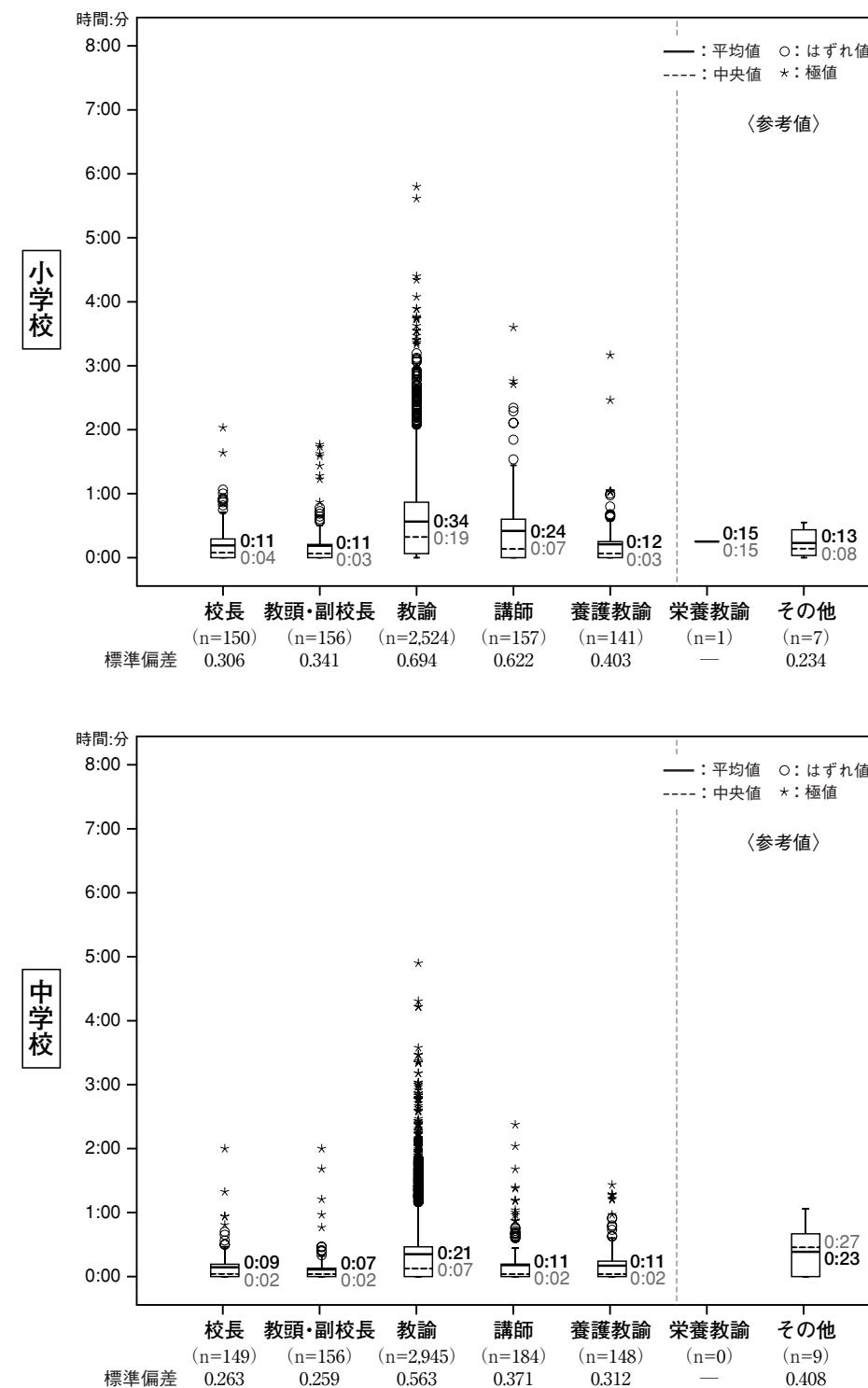
図2-3-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第3期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-3-6のように、小学校・中学校とも教諭で最も長くなっている。小学校と中学校を比べると小学校の教諭の方が34分と長く、中学校の教諭は21分と短くなっている。小学校では、教諭につづいて長いのが、講師の24分、次が養護教諭の12分である。中学校では、教諭につづいて長いのが講師と養護教諭の11分、次が校長の9分である。

図2-3-5と図2-3-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が他の職階に比べて長く残業を行い、自宅では教諭が他の職階に比べて長く持帰り仕事を行っているといえる。

図2-3-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)



次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

第3期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-3-7の通り、小学校・中学校ともに男性の方が女性教員よりも30分ほど長くなっている。小学校では、男性教員は1時間56分、女性教員は1時間27分、中学校では男性教員は2時間23分、女性教員は1時間55分である。これに対して第3期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は図2-3-8の通り、小学校・中学校ともに女性教員の方が男性教員よりもやや

長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 29分、女性教員 31分、中学校:男性教員 18分、女性教員 20分)。

また、平均残業時間量については中学校の教員の方が長く(図2-3-7)、平均持帰り時間量については小学校の教員の方がやや長いこと(図2-3-8)を考え合わせると、小学校の教員は自宅で、中学校の教員は学校で業務を行う傾向があるといえる。

図2-3-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)

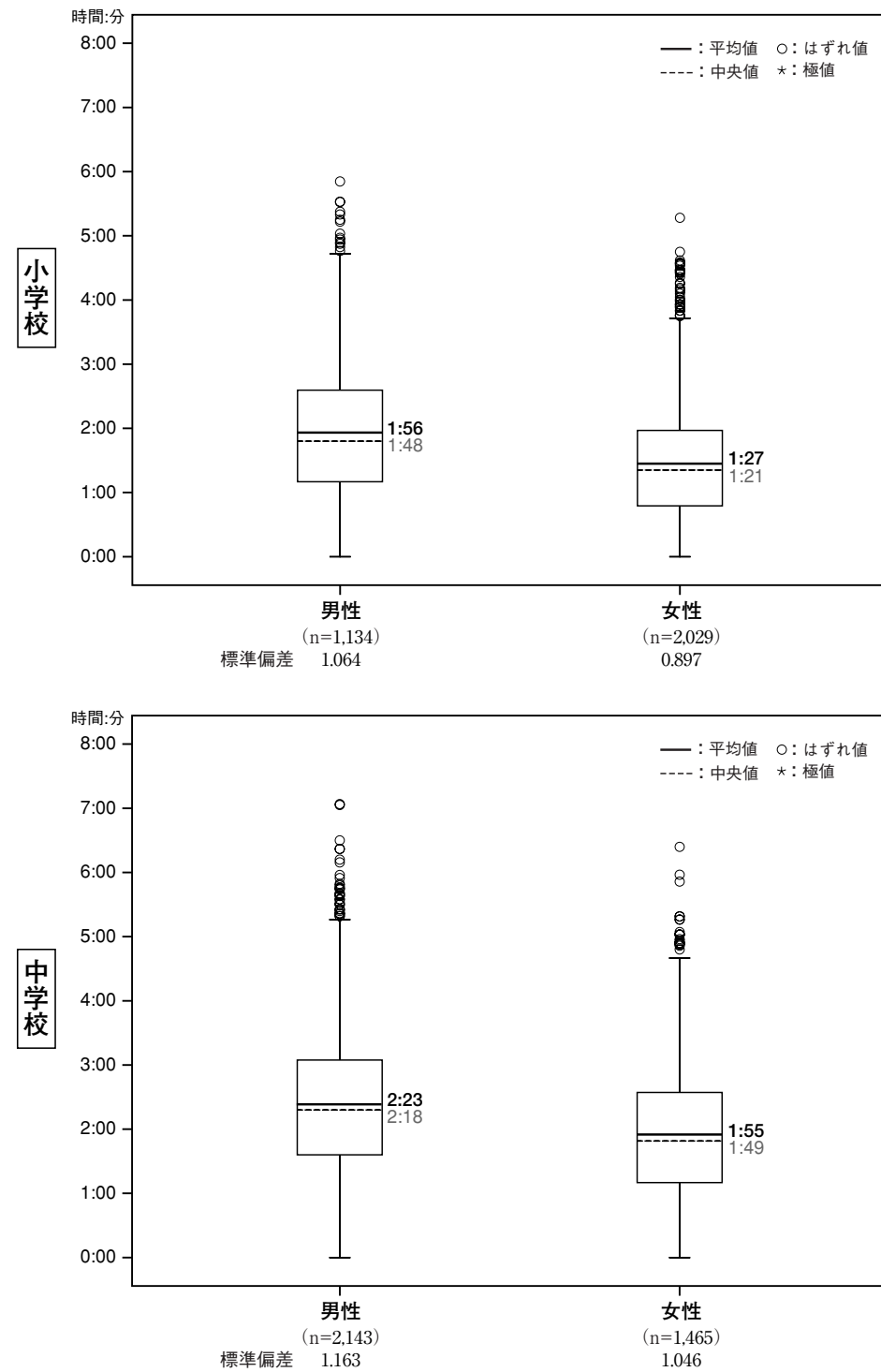
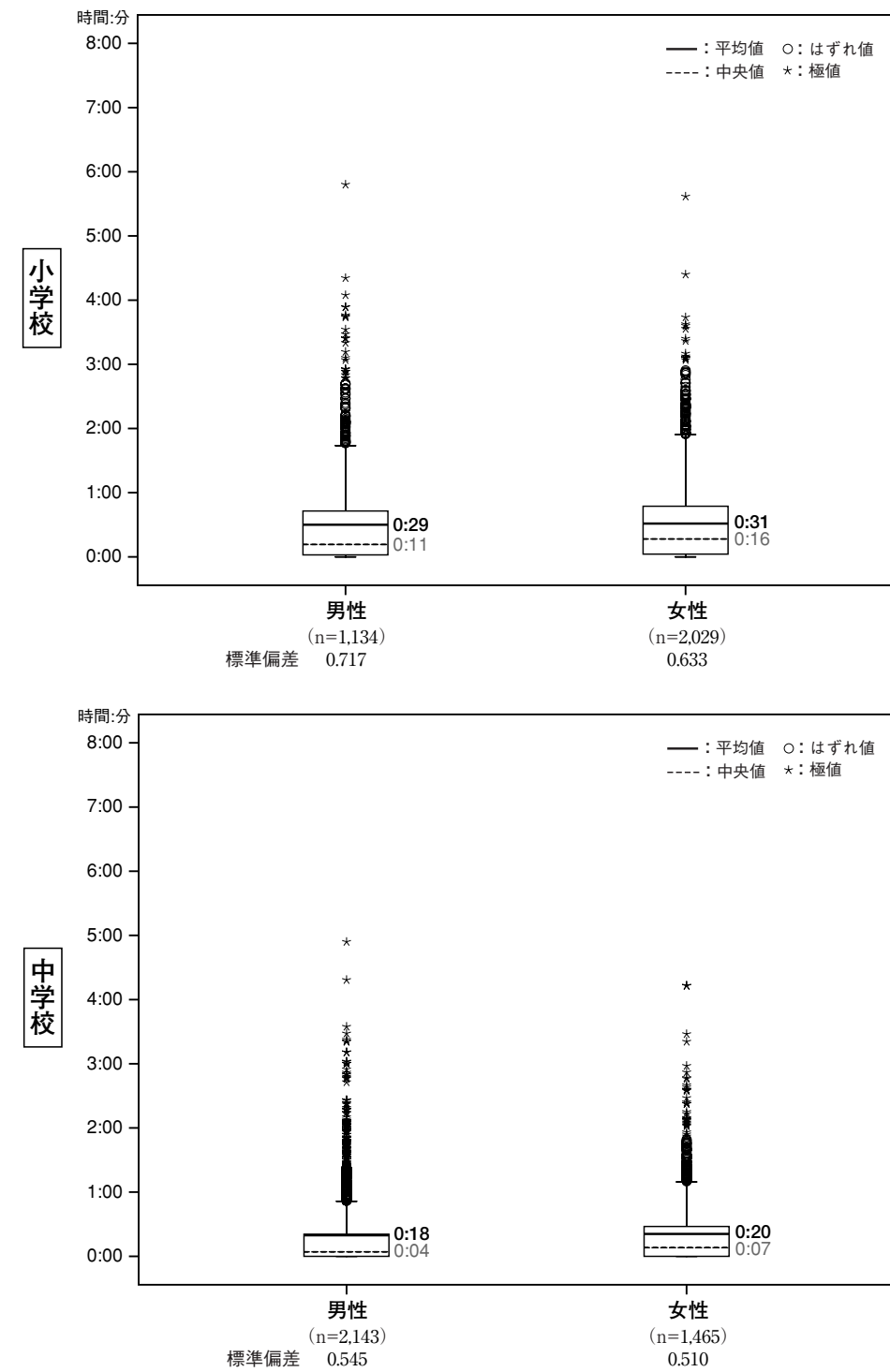


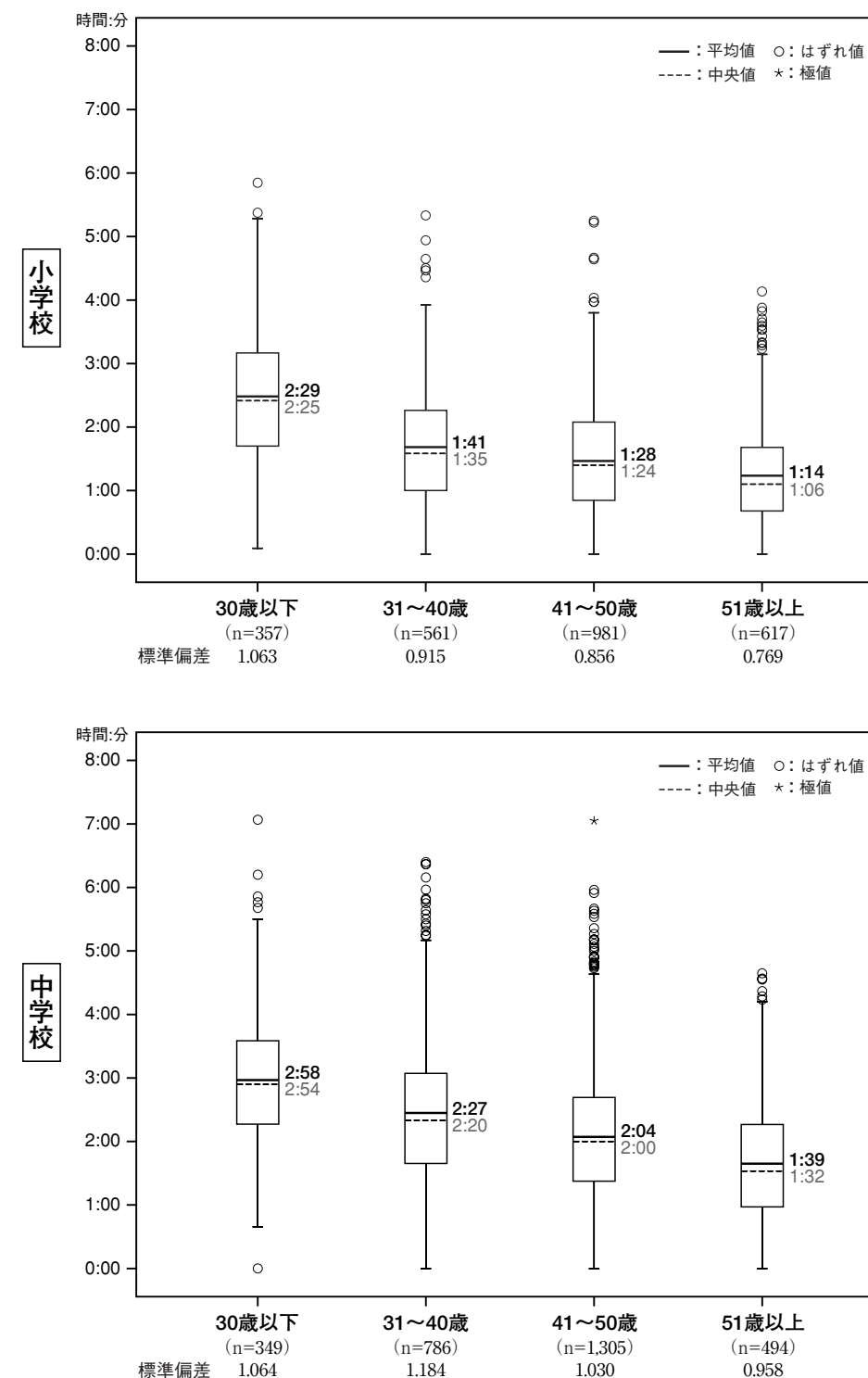
図2-3-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)



最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響だと考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

第3期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では2時間29分、中学校では2時間58分である(図2-3-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて平均残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間41分、41~50歳で1時間28分、51歳以上で1時間14分である。中学校では31~40歳で2時間27分、41~50歳で2時間04分、51歳以上で1時間39分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮されることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任されることなどが考えられる。

図2-3-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第3期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校ともに31~40歳、41~50歳でやや長くなっているが、年齢によって大きな差はないことがわかる(図2-3-10)。小学校では30歳以下で32分、31~40歳で38分、41~50歳で35分、51歳以上で30分である。中学校では30歳以下で19分、31~40歳で22分、41~50歳で21分、51歳以上で21分である。小学校と中学校を比較すると、小学校の教諭の持帰り時間がやや長くなっている。

図2-3-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)

